

「子どもと文化」という視点に立って

本田 和子
(聖学院大学)

(1) 前提としての「子ども文化」概念。

まず、はじめに、近年著しい「文化」という用語と概念の変化に注目しておきたい。最近の辞書的定義は、文化人類学などの影響もあってか、集団の成員としての人の生の様式全体を対象化し、なおかつ、「文化相対主義」の立場に立つものが多い。私も、この文化概念に依拠し、ここでは、子どもの生の様態すべてを視野に入れつつ、それらを文化全体と相対的に位置させつつ、その相互関係を考えることを課題としたい。

(2) 現代文化の動向と子どもの生の様態。

①現代文化の動向を、ここでは、「情報化」と「都市化(消費社会化)」と把握し、それに伴う諸問題を、子どものかかわりで整理しておきたい。

生活世界の情報化は、予測を遙かに上回る速度で進行し、いまや人は、電子メディアのネット上に自身の座標軸を設定することを要請されている。電子メディアは、単に情報伝達的手段であることを越えて、人に新しい自己と世界の探索・構築を可能にし、かつ、人と人の結び付きに奉仕する新しい場と化したのである。

都市化と都市型ライフスタイルの一般化については、次の諸点を押さえておくことが必要である。まず、地球は、全世界的規模で都市化への途を辿り、人もまた、全世界的に都市的存在へと変貌を遂げつつあるということである。ここで言う都市化とは、土地と直接関係しない産業に依拠する社会集団の在り方と、そこに基盤を置く人々の生活様式を総称している。

②情報化社会における都市型生活のなかで、成長の歩みを歩む現代以降の子どもたちに関して、その必然として次のような傾向を措定することが出来る。すなわち、「身体性の希薄化」と「自他境界の溶解化」である。過剰なまでの情報、とりわけ電子メディアに依拠しつつ展開される生活は、「ヴァーチャルリアリティ」の増幅に伴って生身の身体の意味を希薄化させ、また、情報に依拠する都市型生活形態は、「リアルワールド」における存在者意識を希薄化させるため、自分と他者(人もものも含めて)の境界を曖昧化させる方向に働く。

(3) 現代文化のなかでの「児童文学・絵本」の意味。

①希薄化する身体性や自他溶解傾向を踏まえて、児童文学・絵本の機能し得る特質を考えるなら、まず、両者に付与された「もの的特質」に注目することが肝要である。なぜなら、両者ともに電子メディアではなく、印刷メディアであり、文字あるいは文字と絵の「印刷された本」である。したがって、彼らは、それら紙の集積を手に取り、その重量や匂いを確かめつつ、自身の好む場所に携えていき、好みの時間に好みのペースで一枚一枚ページをめくりつつ読み進むことになる。つまり、手に触れるという触覚を通してその世界と関係する。この点において、電子メディアから提供される物語情報とは異なり、同じ想像世界の出来事であっても、「リアル・ワールド」に位置する手掛かりを実感しつつ、物語世界に参入することになる。その意味で、「ヴァーチャル」と「リアル」の違いを身体感覚として体験しつつ想像界をトリップすることを余儀なくされる。

②世界の物語化は、人が言葉を獲得して以来の現象に他ならないが、記号化意識の高まりのなかで従来に勝ってその意味確認がなされつつある。このことを踏まえて、子どもの生の「物語的把握」と「児童書」との関連を考える場合、次の点に焦点を合わせたい。すなわち、文学者と読者とのかかわりとは、「物語」として提示された他者による創造世界に、自らもまた想像力を駆使して参入し、「他者の物語」としての認識に立ちつつ、それを共有するということであろう。他者の創造物であることを自覚しつつそれを共有し、その結果として自身の物語をも豊かにする。自他の境界の溶解しつつある現代においては、このことの意義は再確認されねばならない。

従来、保育研究の場で「児童文学・絵本」が主題化される時、とかく、メディアとしての特性は捨象されがちであったが、「現代文化」という切り口に依るなら、この問題は不可避であろう。そして、訪れつつあるメディア状況、すなわち「文字文化・印刷文化」の退潮傾向のなかで、児童文学・絵本など「本」の形態で提示される「もの」たちが人と取り結ぶ関係のなかで、特に「幼児期」に委ねられる意義・役割に対して、より鋭敏であることが望まれよう。